梅の回廊　菅原道真研究ノート２

東　茂美

一　梅をうたう

道真の梅について語ろう。

盈城溢郭幾梅花　城に盈ち郭に溢れて　幾ばくの梅花ぞ
猶是風光早歳華　なほしこれ風光の　早歳の華
雁足黏将疑繫帛　雁の足に黏り将ては　帛を繫けたるかと疑ふ
烏頭點著思帰家　烏の頭に點し著きては　家に帰らむことを思ふ　（「謫居の春雪」）

延喜三年（九〇三）正月、配所の筑紫にも春は訪れる。春の到来を告げるのは梅の花である。いにしえの中国では、長安からはるか遠くウイグル地方あたりまで派遣された防人たちが、しきりに梅花をうたっている。きびしい冬を越し、なごり雪の降る辺境の駐屯地で、春いちばんに咲くこの花に望郷の想いをよせた[1]。道真もまた西国にあって、都をなつかしみながら梅花をうたうのである。

宣風坊北新栽処　宣風坊の北　新に栽ゑたる処
仁寿殿西内宴時　仁寿殿の西　内宴の時
人是同人梅異樹　人は是れ同じき人　梅は異なる樹
知花独笑我多悲　知んぬ　花のみ独り笑みて　我は悲しびの多きことを

これは「梅花」と題された一作。「宣風坊の北」は五条坊門西洞院、道真の邸宅があった。その書斎山陰亭の梅樹をいう。「書斎記」に「戸前近き側に一株の梅有り」と記される、それ。「仁寿殿」は、公事がおこなわれる紫宸殿の北に連なり、呉竹の坪庭をへだてて、西の清涼殿と相対していた。ここには紅梅が植えられていた。「内宴」なら正月の中旬。山陰亭にいたのも仁寿殿にいたのも、そしてこうして南館にいるのもわたし。しかし眺めているのは自宅でも宮廷でもなく、宰府の梅の花である。梅の花は昔にかわらず春を迎えて、ひとり笑みほころんでいるのに、このわたしといえば、昨年とはうってかわって悲しみにくれるばかりである、と。

二　あの梅この梅

道真に梅花をうたう作品は数多く、菊花とほぼ二分しているといってよいだろう。書斎の梅花をうたえば、こうである（「書斎にして雨ふる日、独り梅花に対ふ」）。

点検窓頭数箇梅　点検す　窓頭　数箇の梅を
花時不記幾年開　花の時　記さず　幾ばくの年か開きたる
宮門雪映春遊後　宮門　雪は映ず　春遊の後

相府風粧夜飲来　相府　風は粧ふ　夜飲したるより
紙障猶卑依樹立　紙障　なほし卑くして樹に依りて立つ
蘆簾暫撥引香廻　蘆簾　暫く撥げて香を引きて廻す
書斎対雨閑無事　書斎　雨に対へば閑にして事なし
兵部侍郎興猶催　兵部侍郎　興なほし催す

道真が兵部侍郎（兵部少輔）を拝命したのは貞観一六年（八七四）一月一五日、二月二九日には民部少輔に転じているので、この間の作だろう。書斎の窓からながめて、花の咲き具合をしらべてみるが、考えてみると、さてこの梅樹にはいつ頃から花がつくようになったのだろうか、と。庭の梅はどれも咲き初めで、まだ花は数えるほどであり、咲き誇るといった体ではないらしい。

こうして菅家廊下の梅をめでながら、宮中の内宴を思い出す。いわば回廊のように、あの梅この梅と、道真の詩心は、めぐっていくのである。内宴では「春雪早梅に映ず」と題して詩を賦した。その後、右大臣邸にも招かれて「東風梅を粧ふ」を詠じたが、はたして宮中の春雪は梅に映ってうつくしく、大臣の官舎の梅も東風が化粧して咲かせたように、これまたうつくしかった。つづけて、にわかに宮中や大臣家での梅をうたい込んで、意味がやや明らかではないのに気づいたらしく、次のような割注をほどこしている。

今年内宴に勅有り。「春雪早梅に映ず」といふことを賦す。内宴の後朝、右丞相、詩客五六人を招き、「東風梅を粧ふ」といふことを賦す。余れ不才なれども、此の両宴に侍り、故に云ふ。

「丞相」は唐名で、右大臣の意である。藤原基経が内宴の後朝に、文才のある者を招いて詩宴を催したのだろう。そこでも自作を披露したというのである。『菅家文草』には「早春、宴に仁寿殿に侍りて、同じく『春雪早梅に映ず』

といふことを賦す、製に応へまつる」と「早春に、右丞相の東斎に陪りて、同じく『東風梅を粧はしむ』といふことを賦す、各一字を分つ。探りて迎字を得たり」の両作がならんでいる。[2]「早春侍宴仁寿殿、同賦春雪映早梅、応製」を引いてみよう。

雪片花顔時一般　　雪片花顔　時に一般
上番梅媛待追歓　　上番の梅媛　追歓を待つ
氷紈寸截軽粧混　　氷紈　寸に截りて軽き粧ひ混けたり
玉屑添来軟色寛　　玉屑　添へ来りて軟なる色寛なり
鶏舌纔因風力散　　鶏舌　纔に風力に因りて散ず
鶴毛独向夕陽寒　　鶴毛　独り夕陽に向ひて寒し
明王若可分真偽　　明王　若し真偽を分つ可くは
願使宮人子細看　　願はくは　宮人をして子細に看しめよ

右は仁寿殿で催された内宴で、詔に応えて披露した一首。梅花の小景だが、雪がうたわれているとはいえ、凜然とした冬のきびしさというよりも、どこかしらあえかな趣きがある。ひらひらと降ってくる雪と梅のほころんだ花びらとが、まるでひとつで、見分けがつかない。梅樹を支えているそえ木は、あわ雪をかぶった梅を見て、やがて春たけてほんものの花が咲き出すのを楽しみに待っている、とうたう。「氷紈」も「玉屑」も雪をたとえたもの。氷でできた白い絹を一寸ごとに断ったようなあわ雪が、咲きはじめた梅の花にふわりと落ちて入りまじる。天の仙郷から降りかかる玉のような雪に、繊細な梅花のなまめかしさがますます引き立つ。「鶏舌」は淡紅梅のはなびらを、「鶴毛」は春雪をたとえたもの。「鶏舌」も「鶴毛」も道真のオリジナルな表現ではないが、読者にあたえるインパ

クトのあることばだ。

「鶏舌香」は香辛料のひとつで、フトモモ科の常緑高木である丁字香の唐名である。白や淡紅色の筒状の花をつける。つぼみや果実を乾燥させふたつに割ると、鶏の舌に似ているところから、こうした名称がついたようだ。八世紀頃、香辛料や生薬として舶来し、後代はもっぱら媚薬としての効能を期待された。

さらに「鶴毛」だが、かの白楽天が雪景をうたって元稹に寄せた、次の一作に見えることばである（「雪中即事微之に寄す」部分）。

連夜江雲黄惨澹　　連夜の江雲黄にして惨澹
平明山雪白糢糊　　平明の山雪は白くして糢糊
銀河沙漲三千里　　銀河沙漲る三千里
梅嶺花排一万株　　梅嶺花排す一万株
北市風生飄散麪　　北市風生じて散麪を飄し
東楼日出照凝酥　　東楼日出でて凝酥を照す
……　　……
舞鶴庭前毛稍定　　舞鶴庭前毛稍定まり
擣衣碪上練新鋪　　擣衣碪上練新に鋪く
戯団稚女呵紅手　　戯団の稚女　紅手を呵し
愁坐衰翁対白鬚　　愁坐の衰翁　白鬚に対す

一晩中、天には黄色い雲がはびこっていたが、夜が明けてみると、ほの白く山には雪が降っている。三〇〇〇里

かなたの天の川に白砂があふれたようであり、梅嶺の一万株の花がいっせいに開いたようにもみえる。あるいはまた、北のバザールで風が起こってうどん粉を吹き散らしたようでもあり、東の楼閣に日が昇ってバターを照らしているようでもある。

また庭といえば、鶴が舞いその白い和毛が落ちているようでもあり、砧のうえに練絹を敷いているようにも見えるではないか。手鞠で遊んでいる女の子は、寒くて赤くなった手にハアッと息をかけて温め、憂いて坐ったままの爺さんは白い鬚をなでたり捻ったり。ここでは白い世界にたったひとつ、少女のてのひらの赤さだけが印象ぶかい。一万株の梅花も前庭に積もった舞鶴の毛も、もちろん雪の比喩である。

道真の作品にもどろう。道真は右に見てきたような唐風の表現を大いに取り入れることによって、風韻ゆたかな宮廷詩を創作する。「明王」は聖明な天子の意。もし天子が紅梅と「鶏舌」、春雪と「鶴毛」の真偽を弁別したいとお望みなら、宮女らに細かく観察させていただきたい、と。

春の雪が梅の花に降りかかっている光景に、さらに宮廷につかえる女房たちの賑わいをそえて一作のとじめとしている。過剰な典故が優美な情緒をかたどらせて、流麗な作品となっている。そして自宅にいてさえ、こうした宮廷の梅花の景と共鳴しあうように、創作は重ねられていくのである。

「書斎雨日、独対梅花」では、つづけて私邸の梅花が描かれる。「紙障」は屏風やついたての類、「蘆簾」は簾の類。「蘆簾」といえば、白楽天にも「蘆簾」の例があり、「来春更に東廂の屋を葺き　紙閣蘆簾孟光を著けん」（「香爐峯下、新に山居を卜し、草堂初めて成る、偶偶、東壁に題す」）とうたっている。香爐峯のふもとに草堂が落成したので、そこで東側の壁に題した詩。同じ草堂をうたうものでことに有名なのは、同題でさらに重ねて創作された四首中の一首だろう。

日高睡足猶慵起　　日高く睡足りて猶起くるに慵し
小閣重裘不怕寒　　小閣裘を重ねて寒を怕れず
遺愛寺鐘欹枕聴　　遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き
香爐峯雪撥簾看　　香爐峯の雪は簾を撥げて看る
匡廬便是逃名地　　匡廬便ち是れ名を逃るるの地
司馬仍為送老官　　司馬仍老を送るの官と為す
心泰身寧是帰処　　心泰に身寧きは是れ帰処
故郷何独在長安　　故郷何ぞ独り長安に在るのみならんや

陽はもはや高く昇った。睡眠は十分とったはずなのに、それでも起きるのが大儀で、こじんまりした草堂で夜着を重ねて寝ていると、どんな寒さも平気の平左。遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聞いているし、香爐峯の雪は簾をかかげて眺めている。なんとも詩趣にかなった住まいではないか。(3)

「匡廬」は廬山の別称、匡山ともいう。この山は、周の時代に、匡氏の七兄弟が世俗を離れて庵を結び、仙人になったところである。当時、楽天が江州司馬(4)だったことから、司馬は閑職であって老いた身にはちょうどよい。この廬山は世間の名利を避けのがれるところとして適当な地であって、心身が安泰なら身をよせるにはふさわしいところで、かならずしも長安だけが故郷とかぎったことではないのだ、と。

こうして楽天は簾をかかげて、香爐峯の雪を見るのであり、道真もまた、楽天よろしく簾をあげて梅の花を眺めつつ、うたうのである。思えば楽天は「司馬」を閑職とうたうのであったが、道真もまた「兵部侍郎」（兵部少輔）を閑職とみなして、「書斎　雨に対へば閑にして事なし」と楽天と同じポーズをとっている。

もう一首、道真の宮廷詩から、梅の花をうたった作品を紹介しよう。

花顔片片咲来多　花の顔の片片として咲み来ること多し
冒雨馨香不奈何　雨を冒せる馨香　奈何にせざらむや
羅袖猶欺霑舞汗　羅袖なほし欺く　舞ひの汗に霑ふかと
花袍自怪沐恩波　花袍自らに怪しぶ　恩みの波に沐るるかと
驚看麝剤添春沢　驚き看る　麝剤の春沢に添ふことを
労問鶯児失晩窠　労ひ問ふ　鶯児の晩窠を失ふことを
五出莫誇承渥潤　五出　誇ること莫かれ　渥潤を承くることを
一天下喜有滂沱　一天の下喜ぶ　滂沱有ることを

「早春に、内宴に侍りて、同じく『雨の中の花』といふことを賦す、製に応へまつる」と題する七言詩。『菅家文草』では元慶三年（八七九）作の「元慶三年孟冬八日、大極殿成り畢りて、王公会ひ賀べる詩」と元慶六年作の「博士難　古調」との間にあるところから、この時期の創作か。「花顔」はここでは梅の花。花びらを散らすさまがまるで美人がこちらに笑みかけているようであり、雨にうたれてほんのりただようその香りに、さてどうふるまえばよいものやら。内宴で女楽を舞った舞妓たちのうすものの袖が、汗でしっとりと濡れているのではないかと、だまされそうなほどに香っている。「花袍」は内宴に参加した近臣たちの、それ。天子の恩徳の波に浴して、しっとりと潤っているのではないかと、疑われる。宮女や近臣たちのさまは、ともに雨に濡れながら咲いている宮中の梅を擬人化してうたったものである。

「麝剤」は麝香、ジャコウジカの雄からとれる。漢方としては「当門子」や「臍香」の別称もある。わずかしか

とれないところから牛黄とともに高貴薬といわれ、一〇〇倍散ほどにうすめて処方する。ただしここではジャコウジカそのもの。「鶯児」はウグイスのこと。「窠」は巣の意。やや難解だが、以下のような内容とみてよいだろう。雨のなかの梅花を、ジャコウジカが芳香をただよわせながら春の沢をあゆんでいくようだと、驚いて見、このまま雨にうたれて散ってしまえば、ウグイスの今宵泊まる宿が失われてしまうと、梅花の労をねぎらう。

「五出」は五片の花弁のある梅のこと。『韓詩外伝』[6]に「凡そ草木は皆五出、雪花ひとり六出。雪花を霙と曰ふ」とあって、『初学記』『白孔六帖』など[7]、さまざまな書物に引用されている。王勃（六五〇～六七六）、盧照鄰（六三五？～六八九？）、駱賓王（生没年未詳）らとともに、初唐四傑とされる楊炯（？～六九二）に、「梅花落」と題する五言詩があって「窗外一株の梅　寒花五出開く……」ともある。道真がどこで学んだか確実なところはわからないが、「五出」でもって梅花を表す、エキゾチックな表現だ。

梅花はたっぷりと雨の恵みをうけている。だからといって、驕りたかぶってはならない。恵みをうけているのは花だけではなく、この広い天下のことごとくがたっぷりと慈雨をうけて、喜んでいるのだから。宮廷の官僚や宮女たちを梅花に譬えた道真は、その雨（天子の恩徳）が、あまねく天下を潤していることをうたい、天子の徳業を讃美して作品のとじめとしている。

三　讃岐国にて

仁和二年（八八六）一月一六日をもって、讃岐国守に任じられた（道真四二歳）。国守時代の道真については、別稿にゆだね、ここでは梅花をうたう「駅楼の壁に題す」の一作だけを紹介しよう。

離家四日自傷春　　家を離れて四日　自に春を傷ぶ
梅柳何因触処新　　梅柳　何に因りてか触るる処に新なる
為問去来行客報　　為に去来する行客の報ぐることを問ふ
讃州刺史本詩人　　讃州刺史　本詩人

割注に「州に帰る次、播州の明石駅に到りぬ。此れより以下の八十首は、京より更めて州に向へるときの作」と記している。道真は在任中、仁和三年の秋に一旦帰京している。年を越して帰任したようだ。京都の家を離れて四日、明石の駅家でうたった。

春の景物もおのずと感傷的になりがちで、梅や柳を見ても何ともセンチメンタルな気分に責められる。そこで駅亭を往来する人びとに、あなたがたもそうかと問うてみたが、梅や柳など大して気にもとめないようだ。すると「讃岐国守」という行政マンである道真は、どうやら本来詩人だということによるらしい。道真はどこまでも詩人であることにこだわるのである。

だから、讃岐にもどって晩春がおとずれても、政庁の役務がおわるやいなや、花や鳥やと浮かれ出てしまう。「春日独り遊ぶ三首」から二首を引用する。

・放衙一日惜残春　　衙を放たれて一日　残んの春を惜しむ
水畔花前独立身　　水の畔花の前にして　独り立てる身
唯有時時東北望　　ただ時時東北のかたを望むことあらくのみ
同僚指目白癡人　　同僚指し目つく　白癡の人なりと
・花凋鳥散冷春情　　花凋み鳥散じて春の情ぞ冷しき

詩興催来試出行　詩興　催され来りて試に出でて行く
昏夜不帰高嘯立　昏き夜も帰らずして高く嘯きて立てれば
州民謂我一狂生　州の民は我を一の狂生なりと謂はめ

と、うたうのである。

「衙」は「御」に通じ、「守り防ぐ」の字義をもつ。警固の兵隊が行ったり来たりしながら守るところから、役所を意味する。ここでは讃岐の国庁。去りゆく春を惜しみ、綾川の土手にひとり出て花を愛でている。どうかすると、都のある東北の方角を眺めてばかりいる。官僚たちはわたしを指さし眉間にしわをよせて、ほれ白痴の守が今日も突っ立ってござる、と。

花は凋み鳥たちもどこかへいってしまった晩春なのに、それでもなお、そのさびしさがかえってわたしの詩興を催したてるので、今日もすこし散策してみる。ところが夜がおとずれて暗くなっても帰る気になれず、詩を口にしながらほっつき歩くものだから、讃岐の民百姓たちは、狂人だといいもしよう。

「狂生」は、酔って水中の月をとろうとしておぼれ死んだ詩仙の李白（七〇一～七六二）にも用例が見られるのだが（「梁甫吟　相和歌辞」）、本邦では、いにしえ天平の詩人藤原万里（麻呂）が、

僕は聖代の狂生ぞ。直に風月を以ちて情と為し、魚鳥を翫と為す。名を貪り利を狥むることは、未だ冲襟に適はず。酒に対かひて当に歌ふべきことは、是れ私願に諧ふ……。

と述べている。自分は天子の徳によって治まる御代の狂生だ。ただひたすら風や月を自分の心とし、風流を楽しむことを本性として、魚や鳥を相手に暮らしを楽しむ。名声をもとめ私利私欲をむさぼるのは、かたよらないわたしの心にはピタリとこない。酒を片手にうたうことこそわたしの願いだ。大方の内容は、こうしたところだろう。

道真は酒をあまりたしなまなかったから、右の一文からそのくだりを省けば、万里の言はそのまま道真のそれを代弁しているといってよい。花鳥風月に遊び、風狂に殉じようとするのである。梅花の景は、〈狂生〉道真がこころゆくまで魂をゆだねることのできる世界だった。

とはいえ、真に〈狂生〉であるものが、自らを〈狂生〉であると自認して形容した例は、古今東西、ありえない。だから、道真もまた、日も経たぬうちに次のようにうたってしまう。「四年三月廿六日作」と題された題詞には、「任に到りてより三年なり」の短い自注がほどこされている。この三月末で讃岐の田舎暮らしも三年目に入るという。

我情多少与誰談　我が情の多少を　誰とともにか談らむ
況換風雲感不堪　況むや風雲を換へて感に堪へざらむや
計四年春残日四　四年の春を計りみるに　残る日は四
逢三月尽客居三　三月尽に逢ひて　客居すること三たび
生衣欲待家人著　生衣は家人を待ちて著むとす
宿醸当招邑老酣　宿醸は邑老を招きて酣なるべし
好去鶯花今已後　好し去れ　鶯と花と　今より已後
冷心一向勧農蚕　冷しき心もて　一向に農蚕を勧めむ

作品中の「風雲を換へて」とは、遠く都をはなれこの鄙暮らしをしているわが身には、の意だろう。田舎ではわが心のうちを語り合うものもいないと嘆くのである。「生衣は……宿醸は……」は、藤原公任の『和漢朗詠集』（上巻、夏・更衣）に、源重之の「花の色に染めしたもとの惜しければ衣替へうき今日にもあるかな」の一首とともに編まれており、ことに有名な語句である。(8)

軽くて薄い生絹の夏衣は、都の妻が仕立てて送ってくれるのを待つことにしよう、去年から醸しておいた酒は春過ぎて熟してきたので、村の爺さんたちを招いていっしょに呑もう。都からの宅配便は伝手をとおしてそれなりに届けられていただろうが、詩語「生衣」は、楽天の「炎涼遷り次ぎて速なること飛ぶが如し　又生衣を脱して熟衣を著る」（「秋に感じて意を詠ず」）に学んだことばだろう。

なによりここで注目すべきは、「好し去れ」以下の結びの二句だろうか。「好去」は唐代の俗語で「さようなら」「ごきげんよう」の意。ウグイスよ、花よ、ごきげんよう、さようなら。春に未練など残さないで、さっぱり風流韻事の心を捨てさって、農耕や養蚕にはげむように部内の百姓たちを励まそう、という。良吏たろうとするのである。

ところが、である。ところがまだ大して季節もうつっていないのに、またまたこのように吐露してしまう道真がいる。七言「首夏に鶯を聞く」から――。

行蔵万物不蹉跎　　行蔵万物　蹉跎せず
四月鶯声聴甚訛　　四月の鶯の声　聴き甚だ訛れり
梁燕雛成争有舌　　梁の燕は雛成りて　争ひて舌あり
窓梅子結覚無窠　　窓の梅は子結びて　窠なきことを覚る
似移愛妾人前哭　　愛を移されたる妾の　人の前に哭くに似たり
同失時臣意外歌　　時を失へる臣の　意の外に歌ふに同じ
鳥若逢春応滑語　　鳥は若し春に逢はば　滑に語らふべし
臣愚妾老欲如何　　臣愚に妾老いにたらば　如何にせむとかする

森羅万象、時のながれにしたがって、けっしてとどまることはない。春もとっくに過ぎさってしまい、うつくし

い囀りを聞かせてくれたウグイスも、シーズン・オフに鳴くので、すっかり訛ってぼけて聞こえる。梁に巣くっているツバメは雛も生まれ、大きな口からは赤い舌がのぞいている。窓の外の梅は花弁を落としてすでに久しく、たくさんの青い果実をつぶつぶと実らせている。

時節おくれのウグイスの声たるや、ほかの女人に寵愛をうばわれ、人前をはばからず泣いている妾の声にそっくりだし、はたまた時運に乗りそこねて君主に棄てられた臣下が、その意外さを哀訴しているのに似ているではないか。それにしても、ウグイスは今年の時節におくれたって、来年の春がめぐってくると、またしきりに囀ることもできよう。けれど、臣下が愚かだったり、妾が老いてしまっていては、もはや手のほどこしようがないではないか。道真は、天子の恩愛をうしない長らく南海道の一国にあるわが身を、「四月の鶯」だといい「愛を移されたる妾」だというのである。

どこにあっても、梅花を見ると、次のような雅景にゆりもどされるのが、道真の常だったように思われる。寛平六年（八九四）の初春の作「梅花を翫ぶ　応製」。

隨処有梅惣可憐　処に随ひて梅あり　惣べて憐れぶべし
不如独立月明前　如かじ　独り月明なる前に立ちたらむには
香風豈啻花吹出　香風　あに啻に花の吹き出すのみならむや
半是清涼殿裏煙　半ばこれ清涼殿裏の煙

道真五〇歳。前年には二月一六日に参議となり、式部大輔を兼任。一週間ほどで、同じ月の二二日には左大弁に転じている。さらに三月にはいり一五日に勘解由長官を兼務、四月一日には九歳で太子となる敦仁親王のもとにあって春宮亮を兼ねた。藤原時平は、寛平四年（八九一）三月一九日に二一歳の若さで参議となっていたが、いよいよ

道真も参議となって、政治の中枢にポストをしめるようになったのである。参議任官を祝って時平から玉帯を贈られたのも、この年だった。[9]

「梅花を翫ぶ」は、宇多天皇の知遇をえて、目をみはるような出世をとげた道真が、宇多の御製に応えた一作である。初春の候、さまざまなところで梅が開花する。その梅花はことごとく讃美されるのだが、なにより感動をおぼえるのは、月明かりのもとただ一本の梅が月光をあつめて咲いている光景である、とうたう。宮廷に侍座する道真をつつむのは、花から香りだす風だけではなく、じつは内宴が催されている清涼殿の奥からただよい出る気高い香りも混じっているのであった。

寛平九年（八九七）正月一四日（二四日か）、「早春、宴に侍りて、同しく『殿前の梅花』といふことを賦す、製に応へまつる」があり、そこでは「請ふらくは　多く憐れぶことな　梅一樹　色青くして松竹　花の傍に立てり」（それほど梅の一樹をあわれんで心配する必要はない。翠色もいきいきした松や竹が、梅の花の傍らには立ちそうているのだから）と、うたっている。清涼殿には松や竹もあるのだから、梅の一樹だけをいとおしみなさるな、というのだが、この口吻からは、逆に、道真がいかに梅への思い入れが強かったがうかがえそうである。

自宅の山陰邸にいても、讃岐国の公邸にいても、はるか流されて命をつなぐ大宰府の南館にいても、目のまえの梅花をとおして道真の詩心がつながろうとするのは、いつも内宴の梅樹だったのかもしれない。

四　処女作

ふりかえってみると、『菅家文草』の巻頭をかざる一首が「月の夜に梅花を見る」であるのは、道真の詩心を語

るうえで、すこぶる暗示的だといってよいだろう。

月輝如晴雪　　月の輝くは晴れたる雪の如し
梅花似照星　　梅花は照れる星に似たり
可憐金鏡転　　憐れぶべし　金鏡の転きて
庭上玉房馨　　庭上に玉房の馨れることを

題詞に自注がほどこされていて、「時に年十一。厳君田進士をして試みしめ、予始めて詩を言へりき。かるがゆゑに篇の首に載するなり」という。斉衡二年（八五五）の作。「厳君」は父是善、「田進士」は父の門人で文章生の島田忠臣。のちに道真は忠臣の娘で宣来子と結婚するから、忠臣は岳父となる人物である。

月が耿耿と照ると、まるで晴れた日の雪のように明るいではないか。梅の花は空にピカピカ光る星のよう。なんともすばらしい、空では黄金の鏡のように月がかがやき、地上の庭園では梅の花房から、ほら芳しい香りがただよってくるよ。月の輝きを一面に降り敷いた雪や金で鍍金された鏡にたとえ、梅花を天空にまたたく星や白玉にたとえている。

こうしたたとえを「可憐」で結んでみただけの、平凡な作で、五言絶句らしいリズムの強弱も表現の起伏も、ほとんど見てとれない。

海彼では、梁の簡文帝（五〇三～五五一）に「雪裏に梅花を覓む」、梁の王筠（四八一～五四九）に「孔中丞の雪裏梅花に和す」、陳の陰鏗（生没年未詳）に「雪裏梅花」といった雪中梅をモチーフにした作品があり、ことに簡文帝には「月を望む」もあって、こうだ。

流輝入画堂　　流輝　画堂に入り

初照上梅梁　　初照　梅梁に上る
形同七子鏡　　形は七子鏡に同じ
影類九秋霜　　影は九秋の霜に類す
桂花那不落　　桂花は那(な)んぞ落ちず
団扇与誰粧　　団扇は誰がための粧(よそほ)ひ
空聞北窓弾　　空しく北窓の弾を聞き
未挙西園觴　　いまだ西園の觴(しやう)を挙げず

「梅梁」は、「梅杖」が梅樹の枝を意味するように、梅の枝の意か。あるいは「梅屋」と同じように梅をうえた屋敷か。「七子鏡」は七面の鏡で装った鏡台。「九秋」は一年の九〇日が秋であるところから、秋。月には桂の木が生えているという伝説から、団扇は望月に似ているところから、ともに月をうたったもの。「北窓」は書斎、「西園」はもともと上林苑をいうのだが、ここではそこまでの意味はあるまい。

月光が画堂までも入りこみ、梅を植えた建物の梁(はり)までも照らしている。月のかたちといえば、七子鏡にひとしいし、ふりそそぐ月明かりは秋の霜のよう。月の世界に生えているという桂の花は散ることなく、円(まどか)で月に似ている扇は、だれのための粧いだろうか。むなしく書斎で演奏を聞き、いまもって西園のさかづきをあげることもない。

「可憐」も簡文帝の同題詩に「憐れぶべし遠近なし　光照　悉(ことごと)く徘徊す」とあり、「可憐」の表現は海彼では多用される表現で、梅の例にかぎれば、梁の鮑泉（？～五五一？）に「憐れぶべし階下の梅　飄蕩(へうたう)風に逐(したが)ひて迴(めぐ)る」（「梅花を詠む詩」）の例がある。

道真は一七歳のときに創作した七言詩「赤虹の篇を賦し得たり、一首」に、「七言十韻、此れより以下四首は、

進士の挙に応ずるに臨みて、家君日毎に試せり。数十首有りと雖も、其の頗観つべきものを採りて留むるなり」として『菅家文草』に四首を採っている。「家君」（父の是善）が文章生の試験対策のために毎日課題を出したらしい。ここでは佳作だけを択ぶとしているので、相当量の試作が棄てられたことになろう。ことは一一歳の頃も同じだろうから、師である忠臣を前に飽くことなく創作をつづける、まだ初冠まえでみずらを結った童児道真のすがたがありありと浮かんでこよう。それにしても、なんと耽美的な一作だろうか。

しばしば人のいうように、この「月の夜に梅花を見る」と延喜三年（九〇三）に絶筆となった「謫居の春雪」は、ひとしく梅をうたうことをもって、呼応しているとみるべきだろう。『菅家後集』は「五言　自詠」から「謫居の春雪」にいたるまでの作品を集め、延喜三年正月のころ、死が近いことを知った道真自身が箱におさめ、紀長谷雄のところに送るよう遺言したという。

今日の流布本となっているのは、藤原広兼なる人物が天承元年（一一三一）に北野社に奉納したもので、すでに道真が没して二〇〇年をこえる歳月を経ている。とはいえ、延長元年（九二三）四月二〇日には、はやくも本官に復して右大臣となり、正二位に叙され、さらに左遷の詔勅も破棄されている。また正暦四年（九九三）五月には左大臣、正一位とし、同じ年の閏一〇月には太政大臣となっており、このあいだも道真の残した『菅家文草』と『菅家後集』は丁重にあつかわれていただろうから、道真のまとめた一本と流布本とに大きな異同があるとは思われない。

もしそうなら、「謫居の春雪」は意味ある一作というべきだろう。「謫居の春雪」以前の作は、次のようにまとめられている。題と作中の一句を列挙してみよう。

・「官舎の幽趣」　秋の雨　庭を湿す　潮の落つる地
・「秋の晩に白菊に題す」　涼秋　月尽きて　早霜の初め

・「晩に東山の遠山を望む」　秋月閑に反照に因りて看る
・「風雨」　偏に菊花の残れむことを惜む
・「燈滅ゆ　二絶」　秋天に雪あらず　地に蛍なし
・「秋の月に問ふ」　春を度り夏を度りて　只今の秋
・「月に代りて答ふ」　莫発き桂香しくして　半円ならむとす
・「九月尽」　今日二年　九月尽
・「偶作」　病ひは衰老を追ひて到る

すべての作品に、季節をうかがわせる語句があるわけではないのだが、「九月尽」までは秋の作であり、「九月尽」が延喜二年九月三〇日作であるのは明らかで、秋まではそれなりに創作がつづいている。直前の「偶作」はいつのころの創作かははっきりしないものの、

病追衰老到　病ひは衰老を追ひて到る
愁趁謫居来　愁へは謫居を趁めて来る
此賊逃無処　此の賊　逃るるに處なし
観音念一廻　観音　念ずること一廻

とうたっている。この一作は隋朝の智顗が講じた『天台止観』（摩訶止観）にある「四山合来、無逃避処」をふまえたもの。智顗は衰老病死の四苦を四つの山にたとえ、けっしてのがれるところはないと説いている。衰えと病いの山の賊がやって来たし、謫居の暮らしがはじまると憂い悲しみの山賊が居場所をもとめるかのようにやって来た。もはや死山の賊が襲っても、逃れるところなどないのだ。南無観世音、お救いください。

創作時は不明ながら、先に七言詩「南館の夜に、都府の礼仏懺悔を聞く」があって、これは延喜元年一二月一九日から二一日まで三日間にわたっておこなわれた礼仏懺悔の法会を背景とする作。次の「歳日の感懐」では「新歳門を突きて来る……合掌して観音を念ずらくのみ　屠蘇　盃を把らせず」と、ここでも観音への帰依をうたっている。

こうしてみると、「偶作」も、延喜二年の礼仏懺悔、一万三千の仏名をとなえるはるかな声を聞きながらの作とも、大晦日から元旦にかけての作とも想像されよう。とはいえ「偶作」では、「人は　地獄幽冥の理に慚づ」（「南館の夜に、都府の礼仏懺悔を聞く」）、「故人　寺を尋ねて去ぬ」（「歳日の感懐」）といった他人への視線はまったくなく、ひたすら死を思い観世音の慈悲にすがる真情しかうたわれていないのに、注視すべきだろう。[10] 死山の賊はすでに道真の命をうかがっていたのである。その後、道真は二か月あまり詩作の筆をとっていない。

五　絶筆、そして死

「謫居の春雪」を、煩をいとわず、もう一度読んでみよう。

盈城溢郭幾梅花　城に盈ち郭に溢れて　幾ばくの梅花ぞ
猶是風光早歳華　なほしこれ風光の　早歳の華
雁足黏将疑繫帛　雁の足に黏り将ては　帛を繫けたるかと疑ふ
烏頭點著思帰家　烏の頭に點し著きては　家に帰らむことを思ふ

延喜三年の春某日、筑紫の天空をおおっているのは、雪、雪、雪。それがまるで梅花がいっせいに咲き散ってい

るようで、都府の内外は白一色の一日となった。「風光」とは、風に吹かれて動く草や木が、日ざしをあびて輝くさまの意。「早歳」とは歳の始めの意。新春の意を含みながら「早歳の華」と春を告げる梅の花をうたっている。

「風光」はそれほど一般的なことばではなく、どうやら道真は、中国文学のアンソロジー『文選』にある謝朓（四六四～四九九）の作品あたりに学んだらしい。[11] 謝朓は「日華は川上に動き　風光草際に浮ぶ」（「徐都曹に和す一首」）、「歳華にして春に酒有れば　初服して郊扉に偃しなん」（「休沐して重ねて還る道中一首」）とうたう。これはたんに語句を借りたというのではあるまい。前者は春ののどやかな風景に、官を退きたい思いをうたい、後者も休暇を終えて公務にもどる道中、役職をしりぞき静かに暮らしたいというのが内容である。そのまま道真の心情に共通するものがあるだろう。

この道真の作品で、もっとも注目すべきは「……雁足……烏頭……」だろう。「……雁足……」はあまりにも有名な、蘇武の雁信にかかわるエピソードである。蘇武（前一四〇～前六〇）が匈奴に遣いした。単于は蘇武の漢への帰還を惜しみ、匈奴に仕えるように迫ったが、蘇武はけっして節を曲げなかった。そのために一九年もの間、北海（バイカル湖あたり）に幽閉され、苦境にたえることになるのである。昭帝のとき、上林苑の遊猟で脚に帛書が結いつけられた雁が射落とされた。結ばれていたのは匈奴にいる蘇武からの便りで、そのかわらぬ忠誠心を知った帝は遣いをだして助け出したという。

「……烏頭……」の主人公は、燕の太子丹。小国の燕に生れた丹は、幼いころ趙の人質となった。同じ頃、秦からも政（のちの始皇帝）が人質として送られてきており、ふたりは親しんだ。その後、丹は燕にもどり太子となり、使者となって秦へ行き、昔なじみの政にあいさつをした。ところが、政のあつかいはたいそう冷たいものだった。

秦王は帰国を許さず、もし烏の頭が白くなり馬の頭に角が生えたら、その時は帰国させてやるという。丹が天を

仰いで悲しむと、天がそれに応えたのだろう、烏の頭が白毛に変わり馬の頭にも角が生じたのである。そこで丹は燕にもどることができた。これは司馬貞（生没年未詳）が著す『史記索隠』所引の『燕丹子』にある話。

道真は右のような蘇武と丹のエピソードをふまえながら、つのる帰京への思いをうたうのである。雁の脚に雪が粘りついて、まるで白絹を結わえているようではないか。天子が御覧になれば、きっと都へお戻しになるだろう。あれ烏の頭に春の雪が点をうったようにのっかっているではないか。頭が白くなった烏、これでかならずや都へ帰れるだろう。蘇武や燕丹がそうであったように……ああ、雪が降る、ああ、梅の白い花弁がちぢに舞う。無限の天空から流れ来る雪は、はるか都にある山陰亭の北窓から見える梅樹を幻視させ、山陰亭の梅の幻はさらに、父是善や師島田忠臣のもとで詩作にはげんでいた少年の日々へと、道真をいざなう。南館の梅から山陰亭の梅へ、山陰亭の梅から華やぐ宮中の梅へ――。幻の梅の回廊をあゆむ、傷心の道真が彷彿とする。

もちろん賢明な道真だから、漢籍の次のようなくだりを知らなかったはずはない。[12] 匈奴に遠征し、蘇武と同様に異郷にあって、帰国することなくついにそこに骨をうずめた李陵は、帰国するようながす蘇武に便りしている。道真も日頃、親しみ諳んじていただろう『文選』から「蘇武に答ふる書」（部分）を一読する。

丁年、使ひを奉じて、皓首にして帰れば、老母は堂に終り、生妻は帷を去る。此れ天下の聞くこと希なる所にして、古今に未だ有らざる所なり。蛮貊の人も、なほ子の節を嘉す。況や天下の主為るをや。……子の帰るや、賜　二百万に過ぎず、位は典属国に過ぎず。

あなたは、壮年にして匈奴へ使いし、白髪頭となって帰国した。老いた母親はもうこの世の人ではなく、年若い妻はすでに再婚していた。こうしたことは世間にめったにないことだし、古今にも例がない。蛮国の人びとでさえ、あなたの節義をほめたたえている。天下の主である天子なら、なおさらではないか。

にもかかわらず、褒賞はたかが銭二〇〇万、役職は「典属国」（蛮族で漢に降伏した人びとをつかさどる役人）にすぎず、わずかの封地も与えられはしなかった。帰国してみたところで、惨憺たるありさま。それでもわたしも漢にもどれというのかい。李陵が蘇武にかけたことばは、そのまま道真にも強烈に響くだろう。

タトエ帰京ガ許サレテモ、右大臣ノ地位ヲ奪ワレ、家族ハ離散シ、道真トイウ名サエ剝ギ取ラレ、今ヤ鯨鯢ト呼バレテイルオ前ニ、昔日ノ栄華ガ戻ッテクルモノカ……

別に、燕丹にまつわる烏頭変毛のエピソードについても、こうだ。百家の言に通じて大儒になったといわれる、後漢の思想家王充（二七～一〇一？）の『論衡』「感虚」から引用しよう。

燕の太子丹は何人ぞ、而も能く天を動かすや。聖人の拘はるる、天を動かす能はず。太子丹は賢者なるに、何ぞ能く此れを致さん。夫れ天能く太子を祐け、諸瑞を生じ以て其の身を免れしむるは、則ち能く秦王の意を和げ、以て其の難を解けばなり。拘はるるの一事は易く、瑞を生ずるの五事は難きに、一事の易きを舎き、五事の難きを為すは、何ぞ天の労を憚らざるや。

湯王は夏台に囚われたし、文王は羑里に拘われ、孔子は陳蔡の野で飢えた。これほどの聖人たちが苦しんでいるのに、天は聖人たちに手を差し伸べようとはしなかった。にもかかわらず、燕丹がどれほどの聖人だというのか、かつて湯王らでさえ天を動かせなかったのに、太子丹くらいで何ができようか。

もし仮に天が太子の嘆きに感じて味方したとしよう。それならわざわざ烏の頭を白くしたり、馬に角を生やしたり、門の木像の脚を肉足にかえたり、太陽を二度にわたって南中させたり、空から籾を降らせたり、それほどの七面倒臭いことを五つもしなくとも、ただ一つ、秦王の心を和ませるだけで、燕に帰れたはずだ。天はなんともご苦労なことよ。燕丹のエピソードは「虚なり」（まっかな嘘っぱちだ）。これが、王充の主張するところなのである。

孔子トイウ大聖人デサエ天ハマッタク動カナカッタモノヲ、タカガ燕丹ゴトキデ天ガ感応シナイダロウ……

その弁は説得力がある。後日談ながら、しばらくして燕丹は燕にもどれたが、秦王が送り込んだ軍隊によって殺されている。

道真がこうした王充の弁を理解できなかったはずはない。にもかかわらず、それでもなお蘇武や太子丹のエピソードにわが身をよせていくのは、ふたりに対する天の憐憫を、道真もまた、どれほど渇望していたかの証左になるだろう。

かの李陵は、蘇武への便りのなかで、

上は老母の年に臨んで戮せらるるを念ふ。妻子は辜無くして並びに鯨鯢為られ、身は国恩に負き、世の悲しむ所と為る……命や如何せん。

と述べている。李陵は、いう。思えば、母は年老いた身でありながら処刑され、妻や子は罪もないのにごとく殺され、わたし自身は国の恩にそむいて、世間の人びとから悲しまれた、この運命はどうしようもありません、と。「鯨鯢」は、不義の罪人として殺されるの意。李陵はすべてを「命」（天の与えた運命）として甘受した。匈奴で二〇年あまりを暮らし、そこで没したのである。

死をたまわったわけではなさそうだが、妻の宣来子は前年（延喜二年）の冬一二月二五日、京の留守宅をけなげに切り盛りする心労からか、夫よりも先に没している。李陵と同じように辺土にあった道真は、「鯨鯢」と呼ばれ京を追われて二年、延喜三年二月二五日、五九歳で生涯をとじたけれど、はたして李陵のように、この天涯の死をもって「命」と自得していただろうか。

注

（1）こうした辺塞の詩歌は「梅花落」と呼ばれ、時代がくだると創作詩の一ジャンルとなった。たとえば唐の盧照鄰の「梅花落」。

梅嶺花初発　梅嶺　花初めて発き
天山雪未開　天山　雪いまだ開けず
雪処疑花満　雪の処　花満つるかと疑ひ
花辺似雪回　花の辺　雪に似て回る
因風入舞袖　風に因り入りて袖に舞ひ
雑粉向妝台　雑粉として妝台に向ふ
匈奴幾万里　匈奴　幾万里
春至不知来　春至りて来るを知らず

前半は男の、後半は女の、それぞれの心情がうたわれている。梅がはじめて咲いたものの、天山はまだ雪におおわれ春はまだ遠く、一面の雪景色はまるで梅が花開いたかと疑われる、という。都にいる女の周りは、梅が花弁をしきりに散らし、まるで好いた男が駐留している辺境の雪景色が想像されてくる。風に運ばれて袖に舞い込み、白粉のように化粧台に散りかかる。なのに、匈奴の地は幾万里もの彼方、春は来たのに男は帰っては来ない、と。「梅花落」は、辺境にあって望郷の悲しみをうたう歌辞である。

（2）ただし「早春侍宴仁寿殿、同賦春雪映早梅、応製」は貞観一五年一月の作ともいわれているから、二作の創作年と注の内容に齟齬が生じてしまうが、今は注にしたがっておきたい。

（3）清少納言は『枕草子』（第二七八段）で、次のように書いている。

雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪はいかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人びとも「みなさる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさるべきなめり」と言ふ。

雪がたいそう深く降り積もっているのを、いつものようでもなく格子を降ろし申しあげて、炭櫃に火をおこして、わたしたち女房が話などをして集まってお仕えしていると、中宮さまが「少納言よ。香炉峰の雪はどのようかしら」と

仰せになるので、格子をあげさせて御簾を高く巻きあげたところ、お笑いになる。ほかの人たちも「みなそれは知っていて、歌などにもうたうのだけれど、思いつきもしなかった。やはり宮にお仕えする人としては、うってつけの人のようですね」という。

御簾を高く巻きあげたところが、清少納言の才智。

（4）「司馬」は地方の第三等官で、実態はともかくも、一般的に閑職だとみられていたらしい。

（5）ただし、元慶五年には清和太上天皇が崩御しているため、内宴は中止されている。同じように元慶六、七、八年もまた中止されているので、元慶三年の作だろうか。創作年代はやや不審。

（6）漢の韓嬰の撰。いろいろな古事や古語を集め、詩経の章句を用いて説明したもの。

（7）『初学記』は唐の徐堅らが玄宗の勅によって編纂したもので、要典故事のアンソロジー、開元一六年（七二八）撰。『白孔六帖』は白楽天の六帖と宋の孔伝の続六帖を合わせたもので、故事成語が豊富。

（8）『和漢朗詠集』は寛弘九年（一〇一二）ごろに成立した。白楽天・元稹・菅原文時・源順らの漢詩と紀貫之・凡河内躬恒・柿本人麻呂らの和歌を組み合わせ、四季と雑に分類してまとめたもの。重之歌は『拾遺和歌集』から採択したもので、「冷泉院の東宮におはしましける時、百首歌たてまつれと仰せられければ」の詞書きがある。

（9）「宰相に拝せらる、藤納言が鄭州の玉帯を賜へるを謝し奉る」とされた、次のような七言詩である。

身多撿束謝高才　身多く撿束して高才に謝す
賞賜分明玉不埃　賞賜分明にして玉も埃あらず
初自鄭州無脛至　初め鄭州より脛なくして至る
更従台閣有心来　更に台閣より心ありて来る
雪慙廉潔随衣結　雪は廉潔に慙ぢて　衣に随ひて結ぶ
花讓栄華遂歩開　花は栄華に讓りて　歩びに遂ひて開く
為向彫文相報道　為に彫りたる文に向ひて相報げて道ふ
鑽堅功臣被誰催　鑽堅の功臣　誰にか催さるると

わが身を慎み、すぐれた人物であるあなたに感謝したい。頂戴した帯にちりばめられた玉は、一点の曇りなく輝いている。

玉帯に脚はないものの、はるばる中国の鄭州から本朝へいたり、さらにあなたのところから厚情をもってわたくしのところへやってきた。雪さえもその色を恥るほどに清廉潔白なあなたの衣を飾り、桜の花がその華やぎを失うほどのあなたの栄華・栄達に、花をそえたこの玉帯。彫りこまれているすばらしい文様に、はっきりいえるのは、学問にはげんできた結果、もしわたしに手柄があるとしたら、誰の力ぞえによるのかということだろう。あなたが力づけてくれたことによるのだ、と。

「鄭州」は今日でいう河南省の州名で、都は洛陽。実際、玉帯が河南省あたりで作られたかどうかはともかくも、舶来の帯だったのだろう。「台」は政治の最高職である三公の位を、「閣」はくぐり戸をいうが、ここでは中納言である時平の邸宅を意味する。「鑽堅」は学問をする意。『論語』「子罕」の顔淵が孔子の徳を讃えたことば、「之を仰げば弥高く、之を鑽れば弥堅し」によるが、ここではその孔子が学問をもって弟子たちを導いたことから、学問そのものを意味するのだろう。

道真は「分憂は祖よりの業にあらぬこと」（「北堂の餞の宴」）であり、あくまで学儒であろうとした。この一首、最高の讃美をもって時平への謝辞となっている。

(10)

この二作の全容は次のとおりである。

・人慚地獄幽冥理　人は地獄幽冥の理に慚づ
　我泣天涯放逐辜　我は天涯放逐の辜に泣く
　仏号遥聞知不得　仏号遥に聞けども知ること得ず
　発心北向只南無　発心北に向ひてただ南無といふならくのみ

・故人尋寺去　故人寺を尋ねて去ぬ
　新歳突門来　新歳門を突きて来る
　鬢倍春初雪　鬢は春の初めの雪に倍れり
　心添蝋後灰　心は蝋の後の灰を添ふ
　斎盤青葉菜　斎盤に青き葉の菜あり
　香案白花梅　香案に白き花の梅あり
　合掌観音念　合掌して観音を念ずらくのみ
　屠蘇不把盃　屠蘇盃を把らせず。

(11) 謝朓（玄暉）は若くして学を好み、その文章は清麗、五言詩に長じた。群籍に通じていた沈約（しんやく）（四四一～五一三）をして、「二百年来、此の詩無し」といわしめたという。

(12) このあたりは、「鯨鯢の出自―菅原道真「自詠」「開元の詔書を読む」「謫居春雪」から―」でくわしく述べた（『比較文化』第13号）。